

司会 それでは第6回 JHK オープンセミナーを開催いたします。今日はNPO 法人地域資料デジタル化研究会副理事長で山中湖情報創造館副館長でいらっしゃいます丸山高弘様に図書館の指定管理者制度の問題、公共図書館におけるデジタルアーカイブの可能性などについてご講演いただきます。

■僕の背景（バックヤード）

丸山 ご紹介いただきました丸山高弘と申します。今日は「持続可能なデジタルアーカイブ構築へのビジョン」というタイトルで、現在まで図書館の活動の中で行ってきていること、その中で感じていること、感じる中で作ってきたものなどをお話ししたいと思います。はじめに、自分がなぜ今このようなことを考え、このような行動をしているのかということをご理解いただくために、私自身のことをお話ししておきます。

1961年、東京で生まれ埼玉で育ちました。高校卒業後、陸上自衛隊に入隊、基地通信隊に属し六本木・桜町（旧防衛庁内）に勤務しておりましたが早めに辞めまして、八ヶ岳・黒姫・西伊豆などのペンションでアルバイト、その後、東京デザイナー学院建築デザイン科でデザインと建築を学び、さらに青山コンピュータCGスクール・メロンという学校で職員として勤めながらCGやCADの基本を学びました。一時期フリーランスの立場でデータベースを作ったり、建築パースの下書きを3Dワイヤーフレームで作ったり、NECの9801シリーズで絵を描くソフトを発売していたzeit（ツァイト）という会社の企画部長、その時には3Gソフト、ペイントソフト、DTPソフトの企画開発をいたしました。

そのころに、アメリカで情報建築家という肩書きで活躍されていたリチャード・ソール・ワーマンという人の影響を受けました。阪神淡路大震災の前年、1991年の神戸でTED4KOBE（テッド・フォウ・コーベ）というイベントがあり、参加したときに情報建築家という人がいることを知り興味を持ちました。そして将来何かそのようなことに携われたらいいなと漠然と考えました。

結婚して八ヶ岳に移住し地元のアド井上という印刷会社に就職、1995年ごろ、インターネット事業の企画に参画、山梨県の企業が集まって自分たちでプロバイダーを始めようとしたYACC（ヤック）という山梨地域インターネット協会にも参加しました。

独立願望が強まり、「八ヶ岳情報文化研究所」という名前で自分のウェブサイトを作りました。その頃ある程度メドがついた時期に、自分の中でキャッチフレーズ的に、『まちの目次、地域の索引』作りを考えながら地域の情報をどのようにオーサリングしたらいいかを仕事のテーマとしていた時があります。

1999年から2000年にかけて、NPO法人文化資源活用協会で「須玉オープンミュージアム」というサイトを立ち上げました。地域の文化財や歴史をインターネットで見られるような博物館的なサイトを作ろうという企画です。緊急雇用対策事業の約6か月単

位の補助金、いわゆる10分の10の真水の補助金が出るという事業です。その中で多種類の情報相互参照システムをベースにして須玉オープンミュージアムを作りました。同時期にNPO法人地域資料デジタル化研究会、今の私が所属しているNPO法人が立ち上がるということで、そこに副理事長で参画しました。2004年に山中湖村の教育委員会から山中湖情報創造館という、図書館機能を持った複合施設が指定管理者の指定を受けまして、八ヶ岳から山中湖に移住して山中湖情報創造館の副館長も務めております。図書館の機能に、もう少し可能性を持った情報拠点としての性格を確立できないかと模索して3年目に入ったところです。当初、『まちの目次』や『地域の索引』などを図書館をベースに作れないかなと思っていたのですが、文部科学省の「2005年の図書館像」の中で地域の情報拠点ということが言われ、図書館機能ではないデジタルアーカイブ作り、地域の情報の収集、整備、編集、発信などを扱える拠点を作りたいと思っています。

ただ指定管理者制度には協定期間がありまして山中湖の場合は3年間です。今年4月に3年目に入りまして、この夏あたりに次の指定管理者の公募が行われると予想しています。

■デジタルアーカイブとNPO法人地域資料デジタル化研究会

一般の方々がアーカイブという言葉を目にする機会、三つほど紹介したいと思います。

「NHKアーカイブス」番組も面白いのですが、川口にある具体的な場所、保存している施設と環境を考えるととても面白い。またNHKアーカイブスの内容を教育機関などに提供しようという動き、そのようにアーカイブというものが一般に触れる機会が多くなってきた。

二つ目が「いま、会いにゆきます」という映画、キーワードとしてアーカイブ星というのが出てくる。アーカイブ星という星がどこかにあって、人々の記憶の中にあるうちは存在できる、記憶から失われてしまうと存在できなくなる。その記憶をどうつなげていくかという話ですが、そのようなところにもアーカイブという事柄が一般の人々の前に出てくるようになった。

三つ目がウルトラマンメビウス。生誕40周年だそうで、最近TBS系で復活しています。このなかにアーカイブという言葉が出てきます。ということは子供たちがアーカイブという言葉に親しみを持つのではないかと思いました。この「ウルトラマンメビウス」という番組はそれまでの「ウルトラマン」、「ウルトラセブン」、「帰ってきたウルトラマン」などなど、それらを全部引きずった物語として作られていて、ウルトラマンが戦った怪獣の記録が、それぞれアーカイブされているというお話です。怪獣の性格や戦い方を調べて戦う、つまりアーカイブを活用している事例として面白いのではないのでしょうか。

このようにアーカイブという言葉が徐々に一般的になってきています。

NPO法人地域資料デジタル化研究会、名前にアーカイブという言葉はありませんが、やろうとしていること、目指していることはデジタルアーカイブを作っていこう、普及し

ていこうということです。この研究会の設立趣意を読みます。

「IT社会の到来はわたしたちにさまざまな世界の情報をもたらしてくれるようになりましたが、一方、地域の情報や過去の遺物、文献情報についてはデジタルアーカイブがなされない限り、インターネットにオンラインされて多くの情報を必要とする人々には届きません」。逆にいえば、デジタル化することによって、遠くの人にも、あるいは時間軸がずれた未来の人たちにも届けていこう、伝えていこうということで書かれています。

「従来の博物館、図書館、資料館等において所蔵する貴重な資料も、このデジタル化なくしては活用されなくなりました。これは逆にどのような小さな地域の出来事でも確実にデジタル化がなされていけば、それは世界の財産になることが可能なのだとわたしたちは考えております。そこで、地域の原資料をデジタル化する研究と実績を積み重ね、失われつつある地域資料に危機感を持つ者、記録することに情熱を持つ者、そして技術的にも優れた仲間が知恵を出し合い、市民の市民による市民のためのデジタルアーカイブの活動を始めました。わたしたちはこのデジタルアーカイブ（日本文庫、山梨の記憶、カインツラ）という言葉があるのですが、生涯学習の場や学校等において広く教材をして利用されることを期待しています。さらにわたしたちの知恵と情熱と技術を有した人材が博物館、図書館、資料館等でも活用されることを期待して、この研究会を発足しました」。

というNPOですので、どちらかという市民活動の延長でこのデジタルアーカイブをとらえていって、それを皆さんと一緒に作ってみませんかという活動の呼びかけです。

次に「わたしたちの使命、ミッション」と書いてあるのですが、4つ掲げております。

- 1) 地域資料デジタル化の研究と実践
- 2) 地域資料デジタル化に関する普及・啓発
- 3) 図書館・博物館などの学習施設の情報化およびサービスに資する事業の受託、
- 4) その他本会の目的を達成するために必要な事業

ということで、この中にデジタルアーカイブという言葉は使われておりませんが、地域資料のデジタル化のところに目標といいますか、ミッションが込められているのです。

このような団体を立ち上げようとした動機をお話いたします。

わたしどもの理事長は小林是綱と申しまして、図書館の世界では新しいチャレンジをしている人なのですが、小林が全国の図書館を見て歩きながら、特に沖縄の図書館を見たときに、閉架書庫に戦争の話も琉球王国の話もいわゆる沖縄の地域の情報が、そのまま手つかずの状態で見捨てられている、置かれている。言い方を変えれば何もされないまま単にそこにあるだけという状況をたくさん目にしたそうです。

実際には私たちも日々の図書館の業務に追われ地域資料の整理や分類という作業にはなかなか手が回らないという経験をしております。公共図書館が持っている資料はたくさんあっても十分に生かされない状況があるということを憂えまして、NPOの活動の中でそういう支援ができないだろうかということが最初の動機になりました。

ただ正直なところ、そのことに対して解決する糸口を沖縄の図書館には提供できていま

せん。これは今後実績を積む中で提案していけることなのかなと思っておりまして、単に沖縄だけではなくて全国津々浦々の公共図書館の、いわゆる閉架書庫と呼ばれている中の地域の情報は、実はたくさん死蔵されている状態です。それらをそのまま人の目にさらすことは資料の保存の立場からも難しいので、せめてデジタル化したものを見ていただく、活用していただくことができないだろうかという考え方です。これが私たちのミッションといえますか、目的の一つになっています。

わたしどもの事務局長も生粋の山梨っ子なのですが、道祖神を山梨で調べると全国的にも珍しい形のもがたくさんあるということに気がつきまして、それをデジタルアーカイブできないかと。行く先々でデジタルカメラで撮りながら、調査しながら、ボランティア活動として取り組んでいます。数が多くなるとさすがに資料価値が出てきます。こんなことも市民活動としてやっているという団体です。

今は理事で、立ち上げの当時は一会員であった主婦がおります。一般の方にデジタルアーカイブを皆で作らしましょうよという活動をしているのですが、ある日ゴミ捨て場で見つけた昔の本を何とかデジタル化して残したい、後世に伝えたいと。ご本人はパソコンを始めたばかりでしたが仲間に聞きながらスキルを磨きまして、今では一人前のデジタル・アーキビストとっていいのではないかと思います。このような主婦の活動もあります。

これがそうです(<http://www.digi-ken.org/archives/kyodo/index.html>)。写真の技術がそれほどではなかった時代、代わりに版画という技術で山梨の風景を残そうと、甲府の師範学校の卒業記念に当時の卒業生たちが作品集を作ったそうです。その本が何気なくゴミ捨て場にと捨てられていた。当時の甲府の様子の木版画が本に張り込んである状態でした。それをデジタル化してウェブ上で見られるような作品にした。このようなものも記録されて残っていると、これを見ながら当時の甲府市の様子などを語れる人がまた出てきたりする。もちろんウェブページを作る以上、著作権処理もし、方々に問合せをし、ご存命の方にはご本人から、亡くなられた方には遺族の方にご承諾を得てということも行っております。

それで、私の思いです。『まちの目次』や『地域の索引』ということをやっとテーマとしてきました。特にデジタルアーカイブということあまり意識したことはなかった。インターネットの時代になってホワイトハウスの情報を見に行くことはできても、では、自分が住んでいるこの町で何が起きているのかということは、当時あまりインターネット上からアクセスできなかった。広報のような印刷物の形ではあっても広報に載らないイベントなどはどのような形で集めて提供したらいいのかということが、私の中でテーマになっておりました。そのようなことも地域資料デジタル化研究会の活動の中で生かせないかということをやっと思っておりまして、あるときにふと、これは図書館の中でやるのが一番いいだろうということにたどり着いたのです。

最初の山梨地域資料デジタル化研究会は任意団体です。後にNPO法人になり、県立図書館、県立文学館からも仕事をいただけるようになり、NPO法人としての事業が始まっ

ていきます。2 年少し前、山中湖村からの指定管理者として山中湖情報創造館という図書館機能をもった生涯学習施設の運営に携わることになりました。日本の公共図書館では最初に指定管理者になった事例です。

公共サービスや文化行政が専門の東京大学の小林真理先生が指定管理者制度について、特に文化的公共性の立場から、どのようなことを考えなくてはいけないかということを書いておられます。著者の中に私も山中湖情報創造館のことを書かせていただきました。

金田一春彦アーカイブスについて。八ヶ岳のふもと、市町村合併になりました北杜市というところに金田一春彦言葉の資料館があります。ご遺族のかたから、開館時たくさんの本を寄贈していただいたのですが、お亡くなりになった後、書簡や録音したテープなどの資料もいただいてそれを整理してほしいという事業を受託しております。

これは図書館と全く違う考え方で、今までのアーカイブ作りのノウハウを集約していかなければいけない。第1期として2000点の目録作りが終わり、第2期の2000点が始まったところです。まず目録を作ってから、デジタル化の方針を決めるという手順が決まっていますので、まだデジタルアーカイブが始まったという段階ではありません。

ちなみに山中湖情報創造館は山中湖畔にある山中湖文学の森公園の中に三島由紀夫文学館、徳富蘇峰の資料館、そして蒼生庵、風生庵と、江戸時代の民家を移築した建物などとともに建っています。

■デジタルアーカイブと私

多くの先輩たちが、たくさんのいろいろな形のデジタルアーカイブを構築してきました。ウェブ上で見られるものもありますし、その施設に行ってみられるものもあります。ただ最近は一時期のデジタルアーカイブ熱も少しくールダウンしてきた。実質的なデジタルアーカイブをどう作ったらいいかということに関心が向いてきたという時代かと思います。一時期はデジタルアーカイブを作るというだけで、補助金が出たという時代がありました。今はそのような状況ではないので、これからどうやって作っていかうか、あるいは今日のテーマである持続可能なデジタルアーカイブを作るにはどうしたらいいのかということを考えていきたいと思います。

須玉オープンミュージアムの話をしたのですが、緊急雇用対策事業という補助金制度で、これは地域の活性化などを目的とした事業であれば10分の10、いわゆる真水の補助金が出るという制度で合併前の須玉町にインターネットのサイトを立ち上げるプロジェクトがあり、私も参加いたしました。ただ冷たい言い方になりますが補助金の切れ目が縁の切れ目のようなところがありまして、補助金が切れた途端に対応が変わってしまった。サーバーは、僕が山中湖に移る関係で私の手も離れてしまった。更新の仕方を伝えたつもりではいたのですが、団体の規模が縮小されて運営資金が少なくなり人も減っていった。しばらくプログラムだけは動いていたのですが、町が合併で市になった時に忘れ去られたよう

で今はアクセスできません。

このような形で全国的にデジタルアーカイブという形の勢いがなくなっているように感じられます。つまり私の中でこれまでのデジタルアーカイブというものを少し見直してみようではないかと。

自衛隊を辞めてから八ヶ岳のペンションでアルバイトをして、八ヶ岳、特に清里という場所に愛着があります。清里の父と呼ばれているポール・ラッシュという方がいらっしやいます。関東大震災のあとにYMCAの関係で来日、国際聖路加病院の再建をしたり、終戦後はGHQの将校として日本の民主主義を根づかせようという活動をしています。清里では日本の民主主義の復興にかかわる事業を始めています。この人は送った手紙、返ってきた手紙を全部ストックしている。その引き出しを見せてもらった時、そのすごさが私の中でアーカイブの原体験になったのかもしれない。

あの仕事を見てアーカイブ、文章を保存するということがどれだけすごいことなのか、私にとっては印象深い出来事でした。

■デジタルアーカイブと図書館

今、図書館を大ざっぱなものとしてとらえてみました。図書館はまず本がある、フロアや本棚がある。OPAC、専門用語なのですが、昔でいうと目録カードのシステムです。手書きの目録カードがありましたが、今はコンピュータ化されて、データベースで検索するというシステムがあります。それから人材としての司書がいるというのが、図書館の一つのフレームワークになっています。

従来のデジタルアーカイブは、本に相当するコンテンツを作るということに力が注がれていた。1冊の本を作る、その編集の過程で資料を集めてきて、ウェブサイトを作ったり、CD-ROMを作ったりということがありますが、それは図書館で例えてみると、本に相当するものを一生懸命作ってきたのですね。一つのかたまりとして、コンテンツのかたまりとして作られたものですから、何か加えようとか、何か書き込みをしようということはなかなか難しい。手間のかかることでして、その後も、本といいますか、コンテンツというデジタルアーカイブを作るにはそれなりのパワーがいります。お金もいるし、人材もいるし、技能もいる。補助金などがついてきた時点ではよかったのですが、そうでなくなったときに、コンテンツとしてのデジタルアーカイブというものが、この先少し見えなくなっているのではないかと感じています。あるいは作りづらくなってきているのではないかと思います。

それに対して何を考えたらいいかということですが、まず図書館というものとデジタルアーカイブというものを比較してみたいと思います。図書館の本棚に並べられている1冊1冊の本は、例えば一片の写真、いわゆる一片一葉などという言い方しますが、一つのパンフレットであったりなど、一つ一つが対象としてあるのではないだろうかと考え

ます。

OPAC、いわゆる目録カードとか検索システムに相当するものが、デジタルアーカイブの中でも検索可能なシステムとして作られるのだらうと考えます。そしてフロアとか書架に相当するものは、コンピュータの記憶媒体、ストレージと簡単にいってしまいましたが、ハードディスクであったり、CD-ROMなどになります。

そして、人材であるライブラリアンとアーキビスト。

このような形でデジタルアーカイブということを図書館にある1冊の本で捉えるのか、その全体のシステムがデジタルアーカイブなのだとか捉えるのかで、アプローチが変わってきます。

その全体がデジタルアーカイブなのだということの一つのフレームワークとして考えますと、例えばおじいちゃんの昔の写真が1枚出てきたよという時、従来のコンテンツを作ろうになると、この1枚だけでは難しい。当時の写真をもっと集められないかとか、コメントを入れたいので何か取材しようとか、いろいろな要素が出てくる。今日たまたまおじいちゃんの昔の写真が1枚出てきた。これをスキャナーで取り込んで、棚に入れる。デジタルアーカイブの一要素として図書館が1冊本を買って本棚に入れるのと同じような形で構築できる。このようなシステムを作ることが、頭の中での持続可能なデジタルアーカイブの形になってきつつあります。

デジタルアーカイブというコンテンツから、デジタルアーカイブという情報空間を作ろうという考え方です。図書館は一冊の本も対象にしますが、一つの情報空間として作られている。それをデジタルの世界で作る。一つのコンテンツではなくて、情報空間としてのデジタルアーカイブを構築していくのだという考え方に、これから切り替えていってもいいのかなと最近感じております。

デジタルアーカイブとは単にデジタルだけではないのです。原物がもちろんあるのです。原物とデジタルをどう捉えるかということ整理して考えるとこのようになるのかなと思っています。フィジカルというのは原物、物理的なものです。これに対して情報化をしていくのだということで考えると、アナログの手法とデジタルの手法がある。具体的に図書館の場合、原物という本があります。従来は目録カードというすごくアナログな手書きのカードを作る、一つの本の情報化を行う。最近ではそれがデジタルになって、マークというマシン・リーダブル・カタログという電子化された書誌データになる。このような形で物理的なものを情報化するときに、アナログとデジタルの手法があるというように考えています。

もう一つの考え方です。今度はフィジカルとカタログとデジタルライズという話ですが、先ほどと同じように原物があります。これに対してデジタル化するときはカタログを作るという作業と同じです。カタログをデジタルにするということと、それから原物を写し取るデジタル化というのがあつた。スキャニングをしたりとか、キャプチャリングを行ったりとか、あるいはデジタルイズなどという言い方をします。物理的な原物とデジタルという対

比の中でいうと、デジタルの中にはカタログを作るということ、データベース・ソフトを使って名前が何ですよとか、作った人はだれですよ、いつごろ作られたというようなデジタル化する部分と、そのものをデジタルカメラで撮ったり、スキャニングをしたりという作業があって、これ全体が原物とデジタルの関係になるのかなと考えています。

混ぜて考えると混乱してしましますが、デジタルアーカイブを作る場合はきちんと切り分けて考えた方がいい結果がでます。

もちろん原物の保存はデジタルになっても変わりありません。まず原物の保存がある。従来はアナログ手法で目録やカタログを作ったり、図録を作ったり、原物を写真で撮ったり、あるいはスケッチをしたりという活動があって、それと同じようにデジタルでも目録・カタログのデジタル化したものがある。データベース・ソフトに検索可能な状態で入力したもの。それからスキャニング、キャプチャリング、あるいはデジタイズなどということを経過して、デジタイズしたものという、このような位置づけが資料を保存する、情報を保存する関係としてあるのだろうなというように考えております。

デジタルアーカイブを作るといって、おおげさなシステムを作るのかなと思いがちですが、実は身近なところにデジタルアーカイブのためのソフトウェアのモデルがあります。私が使っているのはアップル社の i B o o k という M a c O S で動くもの。これに標準で付いている i P h o t o というデジタルカメラで撮った写真を整理するソフトです。これが最近よくなってきて、フィルムのロールがついていて、1回ずつ取り込んだ単位でまとまっています。ばらすこともできますし、二つくっつけることもできます。最近のカメラは優秀で、撮ったときのデータと一緒に取り込める。性能のいいカメラになるとGPSが付いていて緯度経度というデータが保存される。デジタルカメラのソフトがこのような機能を持ち始めていることを考えると、市民が作るデジタルアーカイブというのは敷居がだいぶ低くなっているのだろうと感じます。ただ、これの欠点は情報の項目が少ない点です。ファイルの形式とか、ビットとかドット数、ピクセル数などは出てくるのですが、例えばどこで撮られた写真、何の写真というようなことは自分で入力しなければならない。細かく項目立てをしたフィールドができていません。その辺の弱さは残っています。

このようにデジタルカメラのソフトの性能がよくなっていますので、例えば美術品を系統立てて撮っていけば、シンプルな形ではありますがデジタルアーカイブを作ることが出来るのではないかと思います。

また幼稚園、小学校などでは子供たちの創ったものがたくさんあるでしょうが、引越しや大掃除などで捨てられてしまう危険がある。それをデジタルカメラで撮って、デジタルカメラソフトに入れておくだけで、デジタルアーカイブということを実はやっているのですね。もしかしたら一般の方々はデジタルアーカイブを知らないうちにデジタルカメラソフトを使いながらもうすでに始めているのかもしれない。

これに学校の先生が気がついてくれるとうれしいのですが、グループ学習で模造紙いっぱいグループワークで作るものがあるって、全部とっておくことが出来なくて捨ててしま

うことがあります。先生がちょっと機転を利かせてデジタルカメラで撮っておいてくれれば、次の世代の子供たちに伝えることができるのです。

このようにデジタルアーカイブをもっと簡単に考えて、むしろ記録しておくことが重要なのだということ伝えていければと思っています。これも私たちNPO法人のこれから取り組まなければいけない仕事かなと思っています。

デジタルカメラソフトの性能がよくなってきて、一つのデジタルアーカイブのモデルが作られてきている。これを参考にしながら持続可能なデジタルアーカイブのシステムを作れないかなという思いがあります。

■デジタルアーカイブとWEB 2. 0

WEB 2. 0という最近の流行の言葉がありますが、それほど難しいものではありません。今までインターネットの世界が一方向的な情報の発信、ホームページを作っても、それはホームページを作る人と見る人の関係だったのですが、これからは見ている人が参加することで初めて成り立つウェブサイトというのが出てきます。

私の持続可能なデジタルアーカイブのビジョンの中で、これが市民参加型のデジタルアーカイブのためのモデルになってきました。コンシューマ・ジェネレイティッド・メディアという言い方、消費者が作るメディア、あるいは消費者——メディアの場合本当はオーディエンスというのが正しいそうですが——が参加するということが前提になって作られているメディア。そこに参加のデザインという考え方がたくさん取り込まれているのです。

ブログとかSNS、RSSなどということばを耳にされたことがあると思います。

ホームページは今までHTMLとか、FTPでアップ・ロードしたりとか、オーサリング・ソフトを使うとか、むずかしい世界だったのですが、ブログが登場してからだれでも情報発信できる、そうする人たちが一気に増えました。つまり一般の市民がシステムさえ作られていれば、だれでも情報発信したがつているのだということが実証されてきていると思います。

それからmixi(ミクシィ)。人と人がつながり合うようなサイトが作られています。この中に、自分の写真のアルバムをたくさんの人に見てもらおうという、公開をする場面があります。デジタルカメラは自分のパソコンの中だったのですが、それをウェブ上でいろいろな人に見てもらおうというサイトが立ち上がってきています。

RSS。ブログの何が面白いかというと、ホームページの形ではなくて新しく更新された情報だけを見るという仕組みですね。RSSという言い方をしますが、アドレスさえ登録しておけばその都度サイトにアクセスしなくても、情報の更新や追加をすぐ見ることが出来る。このような形が始まっています。

WEB 2. 0の中の大物、Flickr(フリッカー)とYouTube(ユーチューブ)というのがあります。

F l i c k rは投稿型の写真共有サイトとっていただければと思います。撮った写真がアップ・ロードしてあれば、だれでもユーザー申し込みも無料で見る事ができる、登録することができる。

例えばサーチのワードに山中湖と入れると、いろいろな人が勝手にアップ・ロードした山中湖で撮った写真を見ることが出来る。だれが撮ったかというネット上での名前とかいつというの分かります。このように世界じゅうの人が一つのサイトの中でアップ・ロードをして、公開をしているサイトがあります。

これもひょっとしたらデジタルアーカイブと呼んでもいいのではないかと思うぐらいの中身です。検索する項目が少ないので文章の中に書かれているということが必要になりますので、フィールドとして、項目としてデータベースのように用意されているわけではありません。それでもすでに参加型のこのような写真共有のサイトがたくさん出てきています。

もう一つ注目されるのがY o u T u b eです。インターネット上に自分が撮影した動画をアップ・ロードする。著作権違反のものがあって問題になるのですが、Y o u T u b eでは、ご指摘を受けた場合はそれは避けますよとっている。実際NHKがクレームを付けて削除した画像もあるそうです。これは基本的に動画でメンバー登録は無料です。Y o u T u b eはアメリカのサイトで、向こうではほとんど著作権無視です。映画も自分で勝手にパソコンに取り込んでアップ・ロードしている人がたくさんいるそうです。「ウルトラセブン」の中の第12話は日本ではまず見ることができないのですが、これはY o u T u b eで見られます。円谷でも欠番にしてしまったものなのですが、アメリカで見た人がビデオに録画してそれをY o u T u b eにアップして、今は見る事ができるようになりました。

著作権の問題は確かにありますが、もう見られなくなっていたコンテンツをこのような形で見る事ができた、象徴的な出来事が起きています。F l i c k rとY o u T u b e、この二つがWEB 2. 0の中でよく語られるサイトなので、特に画像や動画をアーカイブするサイトということで注目していただければと思います。

このような参加の仕組みが持続可能なシステムには不可欠なのではないか。私たちはプロとしてのアーカイブを作る必要がありますが、それ以上に一般の人たちが参加する形でのアーカイブ作りは、場を提供できるかどうかにかかっているのかなという思いがします。

余談ですが、デジタルアーカイブを現実のものとして展示しているところがあります。東京・神谷町にある「ストップおんだん館」といい、デジタルではないのですが、びっくりするような展示です。アナログもここまできているのかという見本のように感じます。

■デジタルアーカイブと「これからの図書館像」

地域の情報拠点ということでは、文部科学省の「2005年の図書館像」の中で図書館

はどう変わっていくか、どのようなビジョンを持ったらいいのかということがうたわれ、図書館でデジタルアーカイブを見るというシーンがあります。それを作った図書館のボランティアであるシニアのかたがお孫さんに地域の歴史をパソコンで見せながら、この画像はおじいちゃんがスキャンして作ったのだよということを紹介するシーンがあります。そのようなことが2000年に発表された「2005年の図書館像」という中には書かれてはいるのですが、実際にそれが2006年の現在、できている図書館はほとんどありません。

山中湖情報創造館で、今年度に入ってからそのような機会をちょっと設けましたという程度のもはありますが、多くの図書館ではそんな取り組みがまだ出来ていません。望ましいという意味では、図書館が地域の歴史資料や古文書、絵画、風景などなど、記録して保存して後世に伝えようという活動が2000年に発表された「2005年の図書館像」にはうたわれております。

そして「2005年の図書館像」を作った方が、現在までに出来たか否かは別にして先日「これからの図書館像」という長期のビジョンを文部科学省のサイトに発表しています。

「2005年の図書館像」には歴史資料のデジタルアーカイブの事例が出ていますが、「これからの図書館像」の中には地域で作られている観光パンフレットやチラシなども図書館の資料として位置づけていきたいと思いますということがうたわれております。図書館は今まで本が中心でしたが情報中心のライブラリーに移っていく必要があるともうたわれております。実際に現物を保存するかたわら、これを活用するためデジタル化したり目録を作ったりという作業も出てきます。それらを含めて図書館の活動の幅を広げていこうということがうたわれました。

図書館の資料というと書籍、それから地域資料、郷土資料など。特に本屋さんでは手に入らなくてその地区だけで出版されたものがあります。それから行政の資料、ビデオ、CD、DVDなどもあります。デジタル資料などといい、ウェブサイトもあります。しかし基本的に今まで図書館が扱ってきた資料です。

さらに地域情報ということになると、ちらし、ポスター。これらは掲示をして、はがして、捨ててしまう。資料として何もとっておかないという場合がほとんどです。しかし地域の情報として長年の蓄積の中で資料的な価値が出てくるであろうといわれます。これもリアル・タイムで進行しているデジタルアーカイブの一つの形なのです。

それからパンフレット、メニュー・カタログなども図書館の資料として収集しましょうという活動を始めました。ただ、これをどう使うかというところで少し足踏みをしています。図書館が利用者のために提供する情報源として、歴史的なもの以外にも記録として蓄積していこうという取り組みを始めています。

あとは各種のお知らせです。防災無線などは聞き逃してしまうと、それで終わりになってしまう。これらも図書館がきちんと把握している必要があるのではないか。

それから地域に関するウェブサイト。例えばペンションなどの宿泊施設のウェブサイト

がたくさん立ち上がっていますが、それらも地域の資料として十分に使えるものではないか、収集して整理して提供していく対象ではないかということを考えています。これもデジタルアーカイブの一つです。

さらに地域で放送されたテレビやラジオの番組なども、著作権の問題はありますが地域で紹介された番組として資料にしていきたいという思いがあります。

このように考えてきますと図書館がまだ手をつけていなかったもの、アーカイブすべき情報源はたくさんあるのだということが分かってきました。

山中湖情報創造館でもウェブサイトで情報を発信しています。ブログを使ってのお知らせを含め、職員が考えていることなどを出来るだけ伝えていこうとしています。

インターネット放送でP o d c a s t（ポッドキャスト）がありますが、音声、動画もできます。P o d c a s tを使って図書館でラジオ番組を作る試みも始めようとしています。

ストリーミング。これはビデオや動画をインターネット放送する仕組みですが、一時期に比べて環境が改善していますので、図書館という場所を使ってできるのではないか。最近格差社会と言われていますが、図書館はどのようなかたでも、お金持ちでもそうでない方でも無料で本を貸してくれる施設です。基本的人権としての知る権利を保障する施設ですが、図書館に行けばI C T（インフォメーション・コミュニケーション・テクノロジー）の恩恵を受けられるようにしたい。図書館に行けばパソコンを持っていなくても、インターネットのプロバイダーと契約していない人でもホームページを見ることができし、ブログを立ち上げたり、ポッドキャストをしたり、情報発信をしたりできる場所にしたいと思っております。

現状の図書館はホームページを見るだけで印刷すらさせてくれません。これは大変なことです。現状ではI C Tの恩恵を受けたかったらパソコンを買ってプロバイダーと契約できるだけの経済力が必要です。これらを考えると公の施設がどれだけこのようなことを保障してくれるのかが大きなポイントになっているのです。その中でデジタルアーカイブができる、パソコンを持っていなくても図書館に行けば家族の写真も地域の資料にしてくれるのだという環境を作っていく必要があると考えています。

従来の図書館機能に対して情報リテラシー。最近よくあります。メディアリアリテラシーとか情報リテラシーです。

それから市民メディアの活動の場所。図書館の人間だけが情報発信するのではなく、町の人たちが、自分たちの日々起こっていることを伝えることができる。そのような情報の拠点としての姿が望まれるのではないかと考えています。

そしてデジタルアーカイブの活動ができる場所です。市民レベルのデジタルアーカイブですので数万円のイメージスキャナーやデジタルカメラを使える環境。ネタはたくさんありますので仕組みをどのように作るか。持続可能なデジタルアーカイブを作るためには、

そのような拠点があるということが大きな要素です。

地域の情報拠点というと一つの例があります。9. 11事件のとき、ニューヨーク公共図書館の一職員が仕事ではなく被災地の状況、病院などをホームページで公開したという事がありました。いざというときには地域の図書館はそのようなこともやるのだということだと思います。

これからの図書館像としては、ひょっとするともう図書館といわないかもしれないと考えています。今は文部科学省があり、自治体の教育委員会があり、そして図書館がありますが、総務省の情報政策の中での拠点というのがやはり必要だねという話も出てきています。図書館がこれから向かう一つの方向性なのかなとも思えます。そのような場所を作れて初めて持続可能なデジタルアーカイブの活動もできていくように思っています。

■ SuperOPAC (スーパー・オパック)

従来の図書館の目録、資料の検索システムは本を中心にしたものですから、書名、著者名、出版社、あとは内容や件名などがあり、その程度のものしか入っていません。それだけでは使いにくいというのが現場の図書館での実感です。例えば目次や索引などをデータベースに突っ込む、本をばらして目次だけ集めたり、索引だけ集めたりということも面白いのではないかと考えます。

図書館で仕事をしていると、本棚を見るたびに、この本をばらばらにできたらどれほど気持ちいいだろうかと思ってしまう。例えばヤマネという小さい動物がいます。そのことが書かれた本はたくさんありますが、すべて本というパッケージの中に埋まってしまう。先ほどデジタルアーカイブと本をコンテンツということにとらえましたが、もっとばらばらにして、図書館という情報空間の中でアクセスできるような仕組みというのが必要なのではないかと思っています。

西洋の魔女が鍋をぶくぶく煮ているイメージを想像してください。図書館、情報空間という鍋があって、パンフレットだろうが、本だろうが、有線放送で流れた内容だろうが、そこで煮込まれている状態。スパゲッティを作るフォークがありますね。あのフォークに調べたい検索語を書いてぐるっとやると、どろどろに溶けた状態の中から必要な情報だけ選び出すことができるというイメージです。今ではまだ1冊1冊の本だったり、パンフレットの形だったりなのですが、デジタル化された検索可能な情報空間を作ることによって、このようなイメージのものを実現できるのではないかと思うようになりました。

今のデータベース、いわゆるリレーショナル型のデータベースの限界というのがあります。このようなことを考えながら、この多種類の情報を扱えるデータベースを作ろうというのが私のテーマでした。デジタルアーカイブの対象、原物は本もあるし、掛け軸もあるし、あるいは道祖神だったり、お寺だったり、いろいろな種類のものがあるのです。今ま

ですと対象別のデータベースを作っていたのですが、そうしたものを一つのデータベースに全部フォーカスできるようなものを作りたいと、これが多種類の情報データベースです。

それぞれの情報が相互に関連しています。例えばイベントのちらしに例をとれば、いつ、どこで、だれが主催しているか、これで何種類もの情報の種類ができてしまうのです。一つ一つを一緒に扱うのは難しく、今までだとばらばらに作っていました。人物のデータベースを作ったり、イベントのデータベースを作ったり、それを相互に関連づけていたのですが、それではなかなか検索の要求に追いつかない。ということで作ったものがあります。

OPACを超えるものということで、勝手にSuper OPACなどと言っているのですが、この中にはニュースクリップ、イベント情報、場所、雑誌の記事、団体、人物、あとは自然とか、その他いろいろあって、これらを一度に検索できるデータベースのシステムを作ってみました。例えば、イベント情報はイベントカレンダーの中で位置づけられていまして、カレンダーの中にどのようなイベントがありますよということが書かれている。このような多種類の情報データベースのある一つのアーキテクチャー、構造を作りました。ある人物の情報から、プロフィール>特技>アーティスト>イベント、関連する情報で勤務先>所属する団体>団体のデータベース>そしてイベント情報に関連してくる。そしてイベント情報を見ると、出演する人>開催する場所を関連させたりすることが出来る。

このようなデータベースをこれから作っていこうというのが私の一つのテーマです。

もう一つ、町の情報だとお店もあれば、公園もあるし、あるいは鳥もいるし花もある、そのようないろいろな種類の情報を一つのデータベースの構造の中で扱うことができるという仕組みが必要なのだろうと考えています。

それを発展させていくと歴史を記述するという事も出来ます。今私はNPO法人に所属していますが、所属している期間というのがあって、例えば自分のプロフィールをデータベース化することは構造としてまだ難しいです。一度自衛隊にいたりとか、そのあとどこにいたりとか、時期によって関係性が変わってくるのですが、それをきちんと扱える情報システム、個人でもいいし大きな歴史の流れでもいいのですが、そのようなものを記述するシステムが情報空間のシステムとして必要になってくる。一片一片のデジタルアーカイブする資料がその情報空間のどこに位置づけられるかということ、このシステムの中で考えていけたらと思っています。

■「地理情報システム」と「歴史情報システム」

カーナビで使われる地理情報システム、それと対比して歴史情報システム。それが一つの大きなフレームワークとしてできると、市民参加型の持続可能なデジタルアーカイブが

作られていくのではないかと、今、考えているところです。

デジタルアーカイブの中で歴史という情報空間を作ろう。その情報空間に、例えば市民の方が家族の結婚式の写真をアップ・ロードする。それによって一つのアーカイブの位置に位置づけられる。そのような形が作られたらいいなと思っています。

事件とか、出来事とか、歴史情報システムは時間軸があいまいです。1600年ごろといわれてもコンピュータでは扱えないのです。それをどう扱うか、いろいろな問題があってまだ具体的なものはできていませんが、一つのフレームワークとして作っていきたいと考えています。

「おじいちゃんが子供のころには〇〇〇ってなかったの？」。今で言えば、「お母さんが子供のころはメールはなかったの？」と言われるような、子供や孫の世代にはあって当然のようなシステム、けどまだできていない、でも、それがあると豊かになるのだというシステムが何か作れないかなというのが私たちのNPOの活動の一つでもあります。

■参考資料として

参考資料として興味がありましたらぜひ読んでください。「かもめのジョナサン」を書いたリチャード・バックが「ONE (ワン)」という小説を出しています。これは非常に面白いです。私は情報空間、歴史という情報空間という言い方をしたのですが、リチャード・バックはまた別のアプローチで、何らかの場所が、そこにフォーカスするというのを非常に面白く書いている本です。ぜひ、お読みください。それから先ほどの「いま、会いにゆきます」ですね。それからこのリチャード・ソール・ワーマンの本。

それから震災文庫というのが神戸にあります。図書館の活動なのですが、そこに収蔵されているのは、阪神淡路大震災のときに作られた多種多様な情報源、それらをどのように保存していくかということが書かれている。注目していい本だと思います。この「阪神淡路大震災と図書館活動」、この本もお勧めの一つです。

以上で今日のお話を終わらせていただきます。